
Umlimited

一新

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

U n l i m i t e d

【コード】

N 0 0 8 0 H

【作者名】

一新

【あらすじ】

ごく普通の高校生、祇園守仁の人生はたった一人の編入生、柊美琴によって180度変わってしまう。世界の裏側をしまった守仁は今日を生き抜くことができるのか!?

際限なき世界 1

僕の名前は祇園守仁ぎおんもりひと。ごく普通の高校3年生だ。成績は中ぐらい、スポーツも中の上、当たり障りのない性格のおかげで敵は少ない。と思う。

とにかく目立たないように今まで生きてきた。そしてこれからもごく普通の人生を送っていこうと思っていたんだ。彼女が来るまでは。

「おい、守仁。今日編入生が来るらしいぞ。」

彼の名前は大津真弥おおつしんや。僕が心を許している数少ない親友だ。明朗快活でスポーツ万能、その上頭もいい。勉強が得意というよりも生きていくための頭がいいのだろう。真弥と話しているところがちが学ぶことも多い。

「へえ。この私立高校に編入だなんて珍しいな。」

「なんだよ、それだけかよ。もしかしたらスツゲー可愛い子かもしれないぜ。」

真弥が少しはしゃいで言う。

「そもそもなんで女の子だつてわかるんだよ。」

「勘に決まってるんだろ。間違いないさ。」

真弥の勘はよく当たる。そういうところがまた、彼の賢いところでもある。

そんなことを話しているうちに担任が教室に入ってきた。

「みんなー。ホームルーム始めるぞ。編入生を紹介するからさつさと席につけ。」

おしゃべりを続けたままみんなが席についた。その話題は他愛ない世間話や恋愛話から自然と編入生の話へと変わる。僕にとってはそんなことは心底どうでも良かった。編入生なんかと今さら仲良くしようとも思わないし、それなりに接しておけばいいとしか考えていない。

「よし、みんなに紹介するから入ってくれ。」
担任が教室の外にいる編入生を迎え入れる。

「初めまして。柗美琴ひいらぎみことです。よろしくお願いします。」

これが僕と彼女の出会いだった。僕は彼女との初めての出会いを無感動で受け入れようとしていた。何の変哲もないただの編入生の存在が、将来僕の人生を180度変えてしまう存在になるうとも知らずに…

「女の子だって言っただろ？しかもめちゃくちゃ可愛いじゃん。」
真弥が満足気にニヤニヤしながら言う。

彼女 柗美琴は僕が今まで見てきた同じ年頃の女子の中で、一番可愛いと言っても過言ではない。
しかし、どこか儚げなその雰囲気には違和感を感じていた。

「なあ、真弥。あの子から何か感じないか？」僕が柗美琴を横目で見ながら言う。

「ん？美琴ちゃんか？」真弥はまだ話したこともない彼女のことをそんな風と呼ぶ。

「別に何も感じないけど。まあおとなしそうな感じはするな。どうした？さては一目惚れか？」

「ちげーよ。」

真弥が何も感じないってことは僕の思い過ごしか…

そんなやりとりをしているうちにHRが終わり、テスト前ということもあってクラスのみんなは帰り始めた。僕と真弥は家が近いので毎日一緒に帰っている。なので今日ももちろん真弥と2人で帰ることになった。

「やっぱり可愛い子はいいよなあ。そこにいるだけで気分よくなるし。」相変わらず真弥は正直なやつだ。

「でも彼女、誰とも話してる気配なかったぞ。あれじゃあ可愛くてもなあ。」

「まあまだ初日だからな。そんなすぐには新しい環境に慣れないだろうさ。」

柊美琴について存分に話し合い、真弥と別れた。ん…??あれは…??

僕の目の先にいたのはまぎれもなく柊美琴だった。

「やっと来たわね。」僕を見ると彼女 柊美琴はそういった。

「あ…僕の家の前で何してるんだい??…柊さん。」やっと来たってことは僕を待っていたってことか??今日が初対面なのに。

「あなたが必要な。とにかく私について来て。」

こんなに可愛い子にこんなことを言われるのは初めてなので、なんだかドギマギしてしまう。

そう言つと彼女は僕の腕を掴み走り出した。

「どこまで行くんだよっ!!」息も切れ切れの僕に対し顔色一つ変わらない彼女。

「ここよ。」

連れてこられたのは僕の家から数100m離れた廃ビルだった。もう5年ほど前から工事が行なわれている様子はなく、業者も身を引いたのか、異様な雰囲気をかもしだしている。

いきなりこんなところに連れてこられておとなしくしてる僕でもない。

「そろそろ説明してくれるかな??いきなり連れてこられて意味がわからないんだけど。」愛の告白…っていうのなら歓迎だけど。

「時間がないから簡潔に説明するわ。」柊美琴は淡々と話した。

「この街は昔から邪悪なものが入ってこないように、寺やら門やらがあらゆる方角に設置されてるの。南には水が必要なことから、かつては池があったんだけど、こないだの都市開発で埋め立てられた。それで守護のバランスが崩れたの。」

なんだかわかるようなわからないような。

「それによって今この街は、邪悪なものが入りやすい状況で危険なの。」

「なるほど。で、なんで僕が必要なんだい??僕は霊能力者な

んかじゃないよ。「幽霊は信じるが見たことはない。それに邪悪なものなんて本当にいるのだろうか。そんなことを考えていると、美琴が信じられないことをさらりと言いだした。

「簡単に言うあなた人間じゃないからよ。」

際限なき世界 2 (後書き)

作者多忙のためなかなか更新できず本当にすみません。
そんな中でアクセス頂いた方、ありがとうございます。

際限なき世界 3 (前書き)

できるだけ頑張って更新します。

「…え??」何を言い出すかと思えば僕が人間じゃないだつて??そんなまさか。この17年と4ヶ月を人間として生きてきたんだ。腹が減ればご飯も食べるし、ケガをすれば痛みも感じる。僕はまぎれもなく人間のはずなんだ。

「あなたは元々邪悪な世界から来た生き物なの。邪悪には邪悪で対抗しないと。だからあなたが必要なのよ。」

「人間」じゃなく「生き物」だと言われたのが僕の中で引つ掛かる。「まあ僕が人間かどうかは置いて、僕に何をしろって言うんだ??こう見えて柔道3段!!…なんて特技はないんだけど。」

「それは実戦で明らかになるわ。…ほら、来たわよ。」
そうして彼女が指差した方向には彼女が言う「邪悪なモノ」の姿があった。

その「邪悪なモノ」の姿は人間そのものだった。茶髪でタバコをふかしている。まさに今風の青年って感じだ。

「さあ。行くのよ。」

「まさか僕に言ってるのか??」

「他に誰がいるのよ。闘えばあなたの能力はわかる。とりあえず逝きなさい。」

「…それは漢字が間違ってるんだよな??」そんなことを話してるうちに青年もどきがこっちに向かってきた。手には日本刀が握られている。

「くそつ。やるしかないのかよ。」僕は足元に落ちていた鉄パイプを握り締め、迎え撃った。

青年もどきの斬撃を受け止めた。はずだったが、鉄パイプはあっさりと真つ二つだ。そして僕は左の肩口から右の腹辺りまで、ばっさ

りと斬られてしまった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0080h/>

Umlimited

2010年10月21日23時18分発行